

子どもの本

研究会

※【私の一冊】※ 『私と熊本地震』

熊本日日新聞社編(熊日出版)

木村 彰宏



あの地震さえなかったら。熊本地震後に療養中の妻を亡くした男性の手記からは、やり場のない悲しみ、喪失感が伝わってくる。自宅が全壊した女性は、解体した家の鍵を捨てられずにいるエピソードをつづった。

熊本日日新聞社は、二〇一六年四月の熊本地震から一年を機に手記を募集した。紙面に連載した全七十一編を収録したのがこの本『私と熊本地震』だ。連載・出版の企画段階から携わった。

地震当時、私は読者ひろば面など読者との双方向性の紙面づくりを担当していた。地震後、「だれかに胸のうちを聞いてほしい」。そんな声を多く聞いた。地震の体験や、抱いた思いを共有する機会にしたいと思い、手記の募集を始めた。

かけがえのない人、住み慣れた家を失った悲しみ。家族や近隣の人たちが支え合う中で確認したつながることの大切さ。全国から駆け付けたボランティアや届けられた物資への感謝。日常が少しずつ戻っていくことへの安心感。生活再建を進める中、少しずつ膨らみ始めた希望。一編一編目を通す中で、ある本のことや頭に浮かんだ。

それは、熊本子どもの本の研究会が一九九七年に出版した『神話とのつながり』だ。研究会と哲学者の鶴見俊輔さんが、日常の時間の流れとは異なる「神話的時間」について寄稿を呼び掛け、寄せられた百七十五人の文章を掲載している。そこには、幼少時に野山で遊んだ記憶、心を揺さぶられた本との出会い、身近な人の死など、胸の奥に刻み込まれた特別な時間がつづられている。鶴見さんは、それぞれの人たちの神話的時間を引きだしたことに手応えを感じ、「生涯かけて私の待っていたのはこの仕事だった」と後書きに記した。

あらためて読み返し、熊本地震を体験した私たちの中に、同じように特別な時間が刻み込まれたのではないかと思ひ、二つの本に相通じるものを感じた。熊本地震の手記に流れる特別な時間を共有しあうことで、地震を語り継いでいきたいと思う。

※ ※ (熊本日日新聞社 編集委員兼論説委員)